

ジャパンタイムズ代表取締役社長 堤 丈晴

多文化共生社会の実現を目指す

バクー国際人文フォーラムに参加して

2014年10月2・3日の2日間、アゼルバイジャン共和国の首都バクーで開催された第4回バクー国際人文フォーラム（BAKU INTERNATIONAL HUMANITARIAN FORUM）へ参加するという幸運を得た。まずは、貴重な機会を与えていただいた主催者関係者に深く感謝申し上げたい。

今年のフォーラムには、63カ国から総勢500名を超える各国各界のトップが参集していた。出席者には4名の前大統領、14名のノーベル賞受賞者も名を連ね、文字通り世界中から集まったグローバルリーダー達が様々な今日的課題について討議する貴重な国際会議であった。

初日の会場は、前大統領の名を冠したハイダル・アリエフ文化センター。空想的でうねるような曲線美が印象的だ。この建物をデザインしたのは、イギリスの建築家ザハ・ハディッド氏。2020年東京オリンピック・パラリンピックの主会場となる新国立競技場のデザイナーとして日本でもその名が知られている人物である。

フォーラムはイルハム・アリエフ第4代アゼルバイジャン大統領のスピー

チで幕を開けた。「多文化共生社会の実現」を説かれた大統領の演説は格調高く、大変感銘を受けた。続いてロシアのウラジミール・プーチン大統領からのメッセージが披露され、ワレンチナ・マトヴィエンコ・ロシア連邦議会上院議長が登壇。その後は、ヘレン・クラーク国際連合開発計画総裁、イリナ・ボコヴァUNESCO事務局長、アブドラジズ・アルトワイズリISESCO事務総長と錚々たる面々が登壇され、本フォーラムが広範な課題に取り組むことを印象づけていた。スイスのダボス会議の主題が「経済」なら、本フォーラムでは経済以外の全てのアジェンダを扱うという主催者の意気込みが感じられた。

前大統領、各国政府高官の意見陳述を拝聴した後は、会場内にて昼食。日



本から参加されている民俗音楽学の第一人者、柘植元一東京藝術大学名誉教授とバージュ・フセイン・トルコ中東工科大学国際関係学部長と同席させていただいた。柘植名誉教授からはテヘラン大学に赴任されていた当時のお話やシルクロードにまつわる音楽史など興味深いお話を伺った。バージュ教授にはサーブされる料理を解説いただきながら、楽しい時間とともに郷土料理に舌鼓を打った。

午後最初のセッションは、ノーベル賞受賞者のスピーチ。これだけの世界的賢人が一堂に会する国際会議は他にはまずない。示唆に富む貴重なスピーチばかりだった。休憩を挟んで、翌日開催される8つの分科会のチェアパーソンから、討議ポイントについてのプレゼンテーションを聞く。多文化主義、デジタル社会、イノベーション、持続可能な社会システム、グローバリゼーション、バイオテクノロジー、科学技術、ヒューマニズムと、どの分科会も

現代の重要テーマを扱う。

私が参加した分科会は「デジタル時代におけるメディアの変容」が主題であった。チェアパーソンのロシア・タス通信社ミハイル・グスマン上席役員は、今日のデジタル社会がレガシーメディアにもたらす混沌状態を自動車が發明された当時に例えて説明した。自動車は發明当初、無秩序に走り回っていたが、後にナンバープレートで登録管理され、道路には交通標識が設置されて、走行がルール化された。今のデジタル社会はルール化前のカオスであり、いずれ整理が進むと説き、ソーシャルメディアをライバルと位置づけ過剰に反応することを諫めていたのには説得力があった。

初日のプログラムを終え、用意された送迎バスに乗り込み、宿泊先のホテルへ。車窓から見るバクー市内は、ヨーロッパの伝統的な建築様式の建物と現代的・近未来的デザインの建物が見事に調和し、ライトアップ効果でさら



に美しい景観を演出していた。宿泊先には揃いのユニフォームを着て参加者の世話役を担う「Ask Me Team」が常駐しており、会議期間中、彼らの迅速できめ細やかな対応には感服した。

夕食会ではロシアから参加された方々と同席し、互いの国の関心事について意見を交わした。日本では乾杯は食前に一度行うだけだが、ロシアでは食事中何度も乾杯をする習慣がある。いつもより余計にワインが進んだが、このような文化風習の違いに出会えたのも本フォーラムに参加した醍醐味だった。

酔いを醒まそうと外の風に当たりに玄関口に出たところで、同じく日本から参加されている佐藤勝昭東京農工大学名誉教授にお会いした。佐藤名誉教授のご専門は物理学で、分科会では東日本大震災後のエネルギー事情について発表されるとのことだった。教授は洋画家としても活躍されており、今回のフォーラム参加者全員にお描きになったスケッチ集を配布されていた。バクー市内の街並みなど美しい風景画が

収録されており、参加者から好評を博していた。度々訪れているアゼルバイジャンの魅力をも日本でも広めたいとお話にも、小職も協力を約した。

2日目の分科会は、大変刺激的でたくさんの方の気づきを得られた素晴らしい内容だった。参加者は、各国のテレビ・ラジオ・新聞社、ジャーナリスト、国営・民間通信社、コミュニケーション論・メディア論専門の大学教授陣、NPOなど幅広く、様々な立場から活発に討論した。ソーシャルメディアの台頭、従来のビジネスモデルの崩壊、メディアリテラシーの重要性などの今日的課題が真剣に議論された。中でも印象に残ったのは、ロサンゼルス・ワールド・アフェアーズ・カウンシルのテリー・マッカーシー代表が指摘した海外特派員の派遣数減少をもたらす報道リスクの話だ。インターネットが地理的制約を解消したことで、居ながらにして情報を瞬時に収集できるようになった反面、偏向報道や誤情報を受信するリスクが飛躍的に増大している点について、実体験を基に明快に説明された。

小職も日本のメディア事情について



発言させていただき、情報受信者の習慣の変化に敏感に対応することの重要性を強調した。技術先進国と見られている日本において、いまだにプリントメディアが健闘し、音楽市場においても楽曲がダウンロードではなく大半がCDを介して流通されていることに驚かれた方が多く、発表後参加者数人からユニークなプレゼンテーションだったと感想をいただき、良き思い出となった。アゼルバイジャン国営通信社のアスラン・アハマド・アスラノフ代表からは、会議終了後すぐに再訪のお招きをいただいたことも光栄だった。

2日間にわたる会議の疲れは知的満足

により心地よく感じられ、主催者の行き届いた会議運営にも大変満足した。今回の参加で、唯一後悔があるとすれば、スケジュールの都合で3日目のエクスカーションに参加できなかったことだ。またの機会があれば、ナヒチェヴァン自治共和国への訪問を実現させたい。

今回、凶らずも周辺各国での政情不安や対テロ紛争などが報じられる最中での開催となり、アゼルバイジャン共和国が世界的課題解決に向け、本フォーラムを主催する意義は極めて大きいとあらためて感じた。本フォーラムの今後さらなる発展を心より祈念し、帰路に就いた。